

長崎時代の 中江兆民 富田 仁

——そのフランス語学習の周辺——

兆民・中江篤介の伝記的事歴には不明な部分が多い。慶応元年、土佐藩留學生として長崎に赴き、初めてフランス語を修めた経緯にしても十分に知られていない。平井義十郎という人物についてフランス語を学んだと云われているが、その人物についてもいまだではほとんど忘れられているようである。

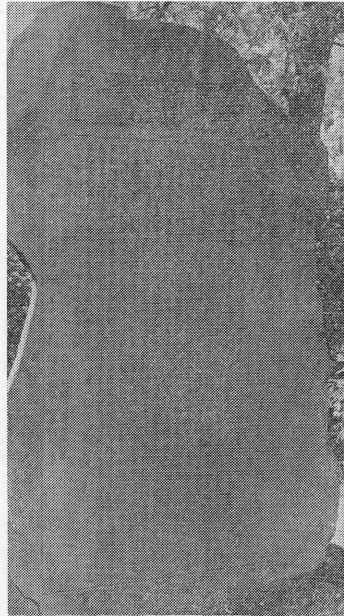
今夏、長崎に兆民のフランス語学習の過程を調べに行くに先だつて、平井義十郎の墓を東京麻布の光林寺に詣で、その墓碑を文面からその略歴を知った。

辨理公使正四位勲三等平井君嘉誌銘

樞密顧問官從二位勲一等伯爵副島種臣篆額

鮑雞間祇侯正四位勲三等 何禮之撰并書

明治廿九年二月十二日辨理公使平井君卒於官其友何禮之哭之曰嗚呼生同鄉家同職同窓／肆業同日釋褐以至宦途履歷超家立身之概未曾有君與予之始終如一者也况親係通家方其／易寶而受身後之托負幽之文義不當辭按狀君諱希昌號東泉實森氏永年君之一子以天保一／年正月二十七日生子長崎興善街幼出繼平井氏安政三年襲家職補稽古通事時



平井義十郎墓碑（光林寺）

又舶旁午需／材孔亟官命譯家英俊子弟兼習英語君與予俱在選中不屑就佗業師受教專依五車韻府等漢／英譯書講究攻習其間勤苦不可名狀業成文久三年擢長崎鎮尹祿屬爲記室班幕府土籍蓋異／數也專預外交樞密兼管洋語學校及海關稅務明治二年任長崎少參事歷民政部土木司權正累／遷外務文書司權正大少記大小丞六年官全權大使書記官出使北京明年宣臺灣審地事務局／出仕事平均蒙獎賞九年內閣置賞動局君以選爲主事轉秘書官書記官時仍草創規畫施設一／賴于君在任幾二十年

功勞懋著露佛伊諸大國暨波斯暹羅布哇等列邦君主各贈以勳章二十／六年辭免尋任辨理公使二十九年二月病篤特旨叙正四位卒年五十有八君性端謹勤于職事／嘗有所爲必審慮而後行不求苟成穆其容而約其身無聲色貨利之好唯奉母氏撫兒女爲樂乎／日躬綜家政事无巨細莫不經其意捐館之前親裁遺書將資產分配妻子及親屬豐富畜各視親疏／爲等其通債父券无力償還者舉付一炬咸感其惠焉原配平井氏先君卒生二女長孝子即嗣子／昌雄室前年亡次秀子適黑屋其繼配鈴木氏生一男一女男曰寅雄遺命別立一家女曰駒子尚／幼在家葬於麻布古河光林禪寺之塋域銘曰

古溪三水 其流湯々 乃卜其吉 厚葬深藏 人雖云逝 其德孔彰 碣而銘之 永誌弗忘

平井義十郎は、天保十年（一八三九）一月二十七日、長崎の唐通事・平井作一郎を父として生まれた。^①平井家は代々唐通事の家で、義十郎も嘉永五年八月二十三日、無給の稽古通事見習を皮切りに唐通事の道を歩み、安政三年三月十七日、父親の跡目相続により稽古通事に昇進した。

周知のように、この時期になると、国際都市の長崎では、従来のオランダ語や中国語だけでは間に合わなくなってきたので、唐通事のなかには鄭幹輔のようにみずから英語を学ぶ者も現れてきた。幕府もまた唐通事に英語の学習を命じ、イギリス船乗組員で新地前の英人止宿所に滞在中の中国人について遊龍彦三郎、彭城大次郎、太田源三郎、何禮之助、平井義十郎の五名に英語を修めさせた。義十郎はこの頃から次第に登用されるようになり、文久三年七月には長崎奉行支配定役格に任用された。やがて製鐵所係、運上所係、濟美

館語などを兼務し、慶応三年六月には長崎奉行支配調役並格に任命され、義十郎は通辨御用頭職に進む。この間、長崎奉行所の役人として外国人との折衝、往復文書の作成と翻訳に携わり、幕末外交の一翼を担ったが、慶応四年一月、長崎奉行河津伊豆守が急に江戸に戻るや、長崎における外交は義十郎がその衝に当たった。

さて、中江兆民が義十郎に師事したのは義十郎の濟美館時代のこととみられる。濟美館の起りは安政五年七月創設の英語傳習所である。^②当時の長崎奉行支配組頭であった永持亨次郎が発議してその役宅であった岩原屋敷内に教場を設け、蘭通事の檜林榮左衛門と西吉十郎兩名を教頭に、オランダ人とイギリス人の教師で開校をみた。この英語傳習所は本邦英語教育の最初の公式機関であった。

四年後の文久二年、英語傳習所は片淵郷組屋敷内の乃武館に移され、英語所と改称し、中山右門太が頭取となった。文久三年七月、英語所は立山奉行所の東長屋に移転し、何禮之助と平井義十郎が学頭に任命されたが、同年十二月、さらに江戸町に移って洋學所と名称を改めた。翌元治元年一月、大村町に語學所を設立し、英語のみならずフランス語、ロシア語の伝習を行なったが、語學所落成までは江戸町の仮語學所に語學熱心な者は誰でも入学させた。

この仮語學所は、慶応元年八月、新町の元長州屋敷跡に移転して濟美館と名称を改めた。従来、運上所が洋書の取締りの任にあっていたものをそれ以後は濟美館がこれを引き受け、たんに外国語だけでなく、地理、数学、物理、経済などの諸学科を教授した。

古賀十二郎氏は、濟美館の教授スタッフの顔ぶれについて、「英語は、フルベッキ、何礼之助、平井義十郎、横山又之丞、柴田大介、柳屋謙太郎、岡田誠一、後ち好樹、玉名純之助、島田種次郎

胤則、西三保太郎、藤岡雄之助、松尾孝太郎、伊寅太郎などが教へ、仏語は「Bernald Petitjean」羅馬公教会の神父にして、司教となる。名村泰藏などが、その教授にあたり、それから、フルベッキ氏は、独逸語をも亦教へた」と述べている。

平井義十郎は、これによると英語の教師であり、フランス語を教えていないようである。だが、幸徳秋水は「兆民先生」において、「先生十七八歳始めて洋學に志し、萩原三圭先生、細川潤次郎先生に就て和蘭の書を學び、慶應元年十九歳にして、高知藩留學生となり、長崎に遊び、平井義十郎先生に就て、始めて佛蘭西學を脩めたり」と記している。これを踏まえてのことと考えられるが、桑原武夫氏も「慶応元年、兆民はその学才を認めた細川の推薦で、英学修学のために、藩の留學生として長崎におくられた。彼はここではじめて平井義十郎についてフランス語を学んだ」と、『中江兆民の研究』で述べている。『明治文學全集13 中江兆民集』所収の松永昌三編「年譜」の慶應元年の項でもやはり、「長崎では、平井義十郎に就きフランス語を學ぶ」と記述されている。

平井義十郎について『長崎縣人物傳』は、「通稱義十郎後希昌と改む東泉は其の號なり、天保十年正月二十七日を以て生る、人と爲り謹嚴、嗜僻なし性至常に奉養を怠らず、支那語に精通し兼て英語に巧にして佛語を解す」と伝えている。『長崎史蹟人物誌』の「平井希昌」の項は、「通稱義十郎東泉と號す、支那語英佛語に精通し維新前徳川幕府が英佛語の普及を計り子弟を養ふや希昌等其の教師となり」と記している。

義十郎が唐通事として中国語に巧みであり、幕命で英語を兼修していたことは文献的にもはっきりしているが、フランス語の学習過

程はまったく伝えられていない。具体的には兆民が義十郎にフランス語を師事したということをあきらかにする資料は見当たらない。義十郎がどれほどフランス語の知識を持ち、どのように兆民にフランス語を教えたのかという点がよくわからない。ほとんどすべての兆民研究が長崎でフランス語を義十郎に学んだとして、これを深く突っこんで検討していない。わずかに松本清張氏の『火の虚舟』で、「中江篤介は土佐藩の留學生としてこの済美館、のちの広運館に通っていた。あるいは、平井義十郎という学頭の名を思い出して話したので、幸徳が取違えて平井について彼が仏学を習ったように書いたのではないかとも思われます」とこの問題に別な解釈をみせている。もともと、松本氏にも重要な誤認があるようだ。兆民は済美館を改称して明治元年四月開校した廣運館に入らず、それ以前の慶應三年には江戸に出ている。また、平井義十郎が頭取となつたのは済美館ではなくて廣運館のことであつた。

兆民の長崎滞在期間（慶應元年十月～同三年（月日不明））から考えると、兆民は済美館でフランス語を修めたようである。前掲の引用文からみると、そこにはフランス人教師プチジャン神父のほかに日本人教師に名村泰藏がいたようであり、当然、この人物について師事したことも考えられるというものである。

名村泰藏は天保十一年十一月一日に長崎に生まれた。姓は北村、幼名を元健、長じて元四郎と改め、やがて蘭通事の名村家を継ぎ、オランダ語を学んだのち、英語、さらにドイツ語とフランス語を修め、語学の才能ゆえに広く知られた。慶應三年、徳川民部昭武のバリ万国博覧会参列に随い渡仏後、泰藏は佛學局助教（明治二年）、司法卿江藤新平の理事官（同五年）、江藤に随行、訪欧、特命全權

辨理大臣大久保利通の清國派遣に随行（同六年十一月）、翻譯課長（同八年）、別局刑法草案取調委員（同年九月）、治罪法草案委員（同十二年十月）、大政官少書記官（同十三年三月）、司法權大書記官（同十四年十月）、海上裁判所取調委員、參事院員外議官補（同年十一月）、司法大書記官、内閣委員（同十五年十二月）、大審院檢察長（同十九年一月）、大審院長心得（同二十五年八月）、貴族院議員（同二十七年一月）を歴任した。

泰藏は明治初年法律取調の任務を帯びてフランスに赴いたときボアソナードを識り、政府の顧問として傭入れ、刑法治罪法の編纂を大成させたが、フランス法律の移入に大きく尽した。官界を退いたのち株式会社東京築地活版製造所社長に就任して実業界に活躍したが、明治四十年九月六日病歿し、小石川傳通院に葬られた。

泰藏の経歴からそのフランス語の知識が相当のものであったことは推測され、フランス語の教師としては平井義十郎よりも泰藏の方が適任であったように考えられる。したがって、兆民の師事した人物として泰藏の存在が大きくクローズ・アップされてくる。だが、その極め手となるような証拠資料はなにもない。

酷暑の長崎できわめて偶然な機会から、皓臺寺にある山本松次郎の墓を訪れた。その墓の入口に「フランス學の開拓者」という標柱があった。寺務所で調査し、山本家の遺族の住所を知り、早速連絡をとって、その夜、立山町に住む山本晴幸氏（松次郎直系の令孫）宅を訪れた。氏の岳父・宮崎懷英氏（立山大神宮々司）も同席され、松次郎について多くのご教示を頂いた。なお、宮崎氏は後日「山本松次郎」の一文をまとめられている。

『長崎縣人物傳』で松次郎の人物を見よう。

「山本晴海の五子なり、諱は良木、又は晴茂後貞幹、霞松、鶴湊、藍水譯史、大州後學、觀瀾舎、等の號あり後晚翠と號す、松次郎は通稱なり、弘化二年正月十五日を以て生る、幼にして父晴海に就き經書諸子百家の書籍を學び博く古今東西の書籍に渉る、萬延元年より大村藩醫村瀬杏庵、長與專齋、廣島藩醫、三刀玄寬、備中足守藩醫緒方郁藏及び小島醫學校雇教師ボードインに従ひて蘭學及び醫術を習ひ、慶應元年後新町濟美館教師ベチジャン、フィゲール、平井希昌、志筑龍三郎、長崎縣雇教師フルベッキ、ヂェリール等に就き佛語を專修して得る所尠からず。

慶應三年濟美館教授助に任じ明治二年長崎府廣運館佛語訓導となり大句讀に進み同四年十二月に至る（西園寺公望侯、井上哲次郎博、土田智部忠成博士等在學せり）明治三年外務省出仕を命ぜらる母の喪に依りて辭す後日見村里正となり、裁判所譯官となり、以文會社新聞編輯となり、脩立社産業雜誌編輯長となり十一年十月上京平井希昌の囑により政府の爲に佛蘭西書を譯せしが病によりて歸郷し終に長崎縣師範學校一等助教論たりしが明治十九年辭職して後又仕へず、明治十六年樂山堂（私塾）を紺屋町に起し子弟を教え傍ら東山學院、羅甸學校に漢籍を教授す、塾生にして前後從學するもの數百人明治三十五年十一月四日卒然として逝く年五十八。」

山本松次郎は日独辞書『袖珍字學語譯義』（明治五年）のほか四卷の『和佛譯義』などの辞書の編纂や『佛學逢源』などの著作を残しているように、長崎において佛蘭西學の普及に貢献した。

前掲の引用文にもあるように、松次郎は濟美館でフランス語を修めたが、その教師陣のひとつに平井希昌（義十郎）がいたことに注目したい。宮崎氏によると、松次郎は濟美館開設と同時にフランス



山本松次郎の墓（皓臺寺）

語学習のために、従来の蘭学と医学を捨ててそこに通い、慶応三年までプチジャン神父とフィゲールの二人のフランス人とフランス語教

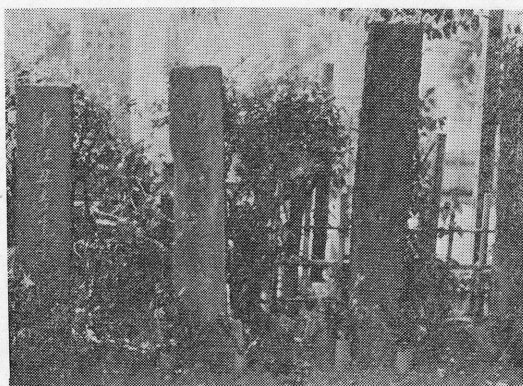
長の平井希昌、教師の志筑龍三郎に師事し、『MÉTHODE FAMILIÈRE』、『GRAMMAIRE ÉLÉMENTAIRE』を学び、『ノエル・シヤパサル共著の『フランス新文典』『近世地理小程』『化学告示』などを教科書にフランス語を学習したという。松次郎は済美館での学修のあと、慶応三年七月にはその教授助に任用されているほどフランス語の上達ぶりがめざましかった。松次郎はとくにフルベッキとデュリーに師事し、一層フランス語の研鑽を積んだ。松次郎は明治元年正月から同四年十二月まで廣運館で『理學告示』、『神代小史』などをテキストとして学んだというが、すでにして佛語訓導、大句讀でもあったことを見落してはなるまい。

ところで、松次郎は中江兆民と同時期に済美館でフランス語を学んでいた。すなわち、兆民は松次郎と同窓の間柄であったはずである。宮崎氏もこの点は認めているが、二人の関係を記した資料はな

い。だが、時期的に両者のつながりは十分に考えられる。もし二人が同窓であったとすると、松次郎が義十郎からフランス語の授業を受けたという以上、兆民も同様に義十郎に師事したことになる。松次郎の側の資料では、義十郎は済美館のフランス語教場長であった。頭取もしくは学頭の地位^①ではなく、済美館のフランス語部門の責任者が義十郎であったとみなされるのであるが、この観点から松本清張氏の引用文を検討するとき、秋水は思い違いをしていたわけではなかったという結論を引き出せるのではないだろうか。廣運館と改称された時点で兆民はそこにはいなかったのであり、廣運館学頭としての義十郎は問題にならず、あくまでも済美館時代の義十郎、すなわちフランス語教場長としての義十郎を兆民はみずからのフランス語の師として秋水に語ったのであろう。

しかしながら、平井義十郎のフランス語の力がどの程度のものであったか判然と知ることができない。前述したように、義十郎のフランス語学習の過程さえわからない。また、済美館のカリキュラムも必ずしもよくわからない。むしろ、廣運館の方が少々時期も新しいためか、その内容はある程度まであきらかにされている。

済美館を廣運館と改称したのは明治元年二月のことである。澤宣嘉が長崎裁判所総督として長崎に着任し、四月八日、学事機構を本學局、漢學局、洋學局の三部局に分けて発足させた。同年六月、三局の教授時間を定めたが、本學局は毎日辰刻（午前八時）から未の半刻（午後三時）まで、漢學局は巳の半刻（午前十一時）から未の半刻（午後三時）まで、洋學局は辰の刻（午前八時）から未の刻（午後二時）まで、毎月、一と六の日を休日とした。同月、本學局は興善町に移り、八月には新町の廣運館と本學局は西役所内に移転し



中山民慶骨之標（青山墓地）

た。同二年、漢學局は本學局と合併して中島聖堂の明倫堂に移った。翌三年五月、廣運館の大學校の所轄となり、十月にはフランス領事レオン・デュリールがフランス語の教授にあたった。四年七月には國學局が廃止されたが、この頃の廣運館の学生数は三四九名で、内訳は、國學百人、漢學十七人、英學百一十人、佛學四十八人、魯學二十一人、算術五十二人であった。同年十一月、廣運館は文部省の管轄に移された。明治五年八月、第六大区第一番中學と改称され、さらに翌年十月一日、廣運學校と名称を改め、それが三度改められて長崎外國語學校となったのは七年四月十七日のことであった。これが長崎英學校（明治八年一月）となり、十一年三月に廃止され、長崎縣長崎中學校が設立され、長崎縣長崎外國語學校と改称され、長崎中學校、長崎商業學校へと発展していった。その変遷はすこぶる目まぐるしく、時代の激動が如実に反映されているよう。

以上のように長崎におけるフランス語学習の問題をみてくると、兆民が幕末の長崎で初めてフランス語を学んだ師としての平井義十

郎の存在はすこぶる大きなものであったことがわかることだろう。平井義十郎は明治新政府にあっては民部省土木權正から工部省出任となり、二等書記官として特命全權大使副島種臣に随行して清國に赴いたり、太政官權大書記、賞勳局主事、太政官大書記官を経て、辦理公使としてアメリカに駐劄したのち、明治二十九年二月十二日に歿したが、その語学力と海外事情の知識で広く世に用いられた人物であった。『萬國勲賞略誌』『日本勲章紀章誌』などの著作を残しているが、明治元年に澤宜嘉長崎裁判所総督の命で訳出した『萬國公法』十巻は彼の翻訳としてのみならずこの種の訳業としても高く評価されている。（一九七五・十二・二十四）

註 ① 平井義十郎の事歴は『長崎縣人物傳』（長崎縣教育會 大正八年五月）、『長崎史蹟人物誌』（長崎市役所 大正九年四月）等を参考にした。

② 濟美館の沿革は、古賀十二郎『長崎洋学史』上巻（長崎文献社 昭和四十一年三月）に詳しい。

③ 『長崎洋学史』上巻二〇〇ページ。

④ 幸徳秋水『兆民先生』（博文館 明治三十五年五月）

⑤ 『長崎縣人物傳』八五四ページ。

⑥ 『長崎史蹟人物誌』六五ページ。

⑦ 松本清張『火の虚舟』（文藝春秋社 昭和四十三年五月）二四ページ。

⑧ 名村泰藏の経歴は『長崎縣人物傳』、『長崎史蹟人物誌』を参照。

⑨ 『長崎縣人物傳』六三三―三四ページ。

⑩ 宮崎懷英「山本松次郎事歴」（未発表原稿）

⑪ 註⑩

⑫ 『長崎洋学史』上巻「二十八 英語伝習所 其他に於ける語学の研究」参照。